

# ダニエルの書 - 第145号

聖書の預言と時事の解釈：現代政治と宗教的象徴に関する一つの視点

Jeff Pippenger

2024-03-19

ウォーク主義の宗教（ソドム）と共産主義の政治（エジプト）は、最も裕福な大統領が2015年に大統領選出馬の意向を表明したときに台頭し、彼が政治的な証しを立てたのち、2020年に殺された。教皇は、預言的な三日半のあいだサタンの証しを立てたのち、1798年に預言的に殺された。しかし、神の預言の御言葉は、教皇が竜との戦いにおいて勝利を収めることを明らかにしている。

人の子よ、エジプトの王ファラオに向かって顔を向け、彼とエジプト全土に対して預言せよ。言え、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはおまえに敵対する、エジプトの王ファラオよ。おまえは、その川々のただ中に横たわる大いなる竜で、『わたしの川はわたしのもの、わたしは自分のためにそれを造った』と言った者だ。エゼキエル書 29:2、3。

エジプトは大いなる竜であり、ファラオの無神論はフランス革命の無神論と二十一世紀のグローバリズムを象徴していた。二十一世紀の地の獣という枠組みの中では、そのグローバリズムは民主党によって代表されている。エゼキエルは、神がエジプトに敵対しておられることを示しており、さらにその章で、神がエジプトを北の王に与えると示す。その北の王はその箇所ではネブカドネザルと特定され、終末における偽の北の王を表している。偽の北の王とは教皇権であり、神はエゼキエルを通して、ネブカドネザルがご自身の懲らしめの杖として果たした奉仕への報酬として、エジプトを北の王に与えると明らかにしている。神は、後の雨が到来する時期に、エジプトを教皇に与えると示している。

第二十七年の第一の月、その月の一日に、主の言葉が私に臨んで、こう言った。「人の子よ、バビロンの王ネブカドネザルは、ツロを攻めるため、その軍勢に大いなる働きをさせた。すべての頭ははげ、すべての肩はすりむけた。それでも彼も彼の軍勢も、ツロに対して行ったその労苦のための報酬を受けなかった。ゆえに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはエジプトの地をバビロンの王ネブカドネザルに与える。彼はその群衆を奪い、その戦利品を取り、その獲物を取る。それが彼の軍勢の報酬となる。彼がツロに対して仕えたその労苦のために、わたしは彼にエジプトの地を与えた。彼らはわたしのために働いたからである」と主なる神は言われる。「その日、わたしはイスラエルの家の角を萌え出させ、彼らのただ中であなたの口を開かせる。こうして彼らは、わたしが主であることを知る。」 エゼキエル書 29:17-21

神が「イスラエルの家の角を芽生えさせる」その「日」とは、後の雨が降りかかり始めた2001年9月11日である。その時、主は見張り人たちを起こし、第三の災いの「ラツパの音に耳を傾けよ」と告げられた。というのも、主は、神が「彼らのただ中であなたに口を開かせる」とされることを指し示されたからである。「ただ中」とは、2001年9月11日に後の雨が降りかかり始めた時から、聖霊が限りなく注がれる日曜法に至るまでの期間を指し示す。その二つの道しるべの間（ただ中）において、二人の証人、または二つの角

が証言を与え続け、2020年に彼ら二人とも街路で殺されるに至った。

彼らは殺される前に自らの証しを立て、殺されたのち、第八であって、すなわち七つに属する者として復活させられた。彼らは、無神論（エジプト）と不道徳（ソドム）という竜の権勢によって殺害された。彼らが神にささげた奉仕のゆえに、神はその報いとしてエジプトを彼らに与えると約束された。ダニエル書十一章四十一節において、北の王がアメリカ合衆国という麗しの地を征服するとき、続いて彼はエジプトを取る。これは、神の摂理的な御業において彼がささげた奉仕に対する報酬であるからである。

ああ、アッシリアよ、わが怒りのむちよ。彼らの手にある杖はわが憤りである。私は彼を偽善の国に遣わし、わが怒りを受ける民に対して彼に命じて、戦利品を取り、獲物を奪い、彼らを街路の泥のように踏みにじらせる。イザヤ書 10:5、6。

アッシリア人は北の王であり、終末における偽の北の王である教皇制を表している。アッシリアとバビロンは、イスラエルの絶え間ない反逆のゆえに、北王国と南王国の双方に裁きをもたらすために用いられた。

「こうしてイスラエルは自分たちの土地からアッシリアへ連れ去られた」「彼らが自分たちの神、主の声に聞き従わず、主の契約を破り、主のしもべモーセが命じたすべてにも背いたからである」。列王記下17:7、11、14-16、20、23;18:12

「恐るべき裁きが十部族に下された中であっても、主には賢明で慈しみに満ちた御目的があった。彼らの父祖の地において、もはや彼らを通しては成し得なくなったことを、主は彼らを異邦人の中に散らすことによって成就しようとされた。人類の救い主によって与えられる赦しにあずかることを選ぶすべての者の救いのための主の御計画は、なお成就されねばならなかったものであり、イスラエルに臨んだ苦難のうちに、主は地上の諸国民に御栄光が現される道を備えておられた。捕らえ移された者たちが皆、悔い改めのない者であったわけではない。その中には、神に対して真実であり続けた者たちもいれば、主の御前にへりくだった者たちもいた。これらの「生ける神の子ら」（Hosea 1:10）を通して、主はアッシリアの領内において多くの者に、御品性の特質と御律法の善さを知らせようとしておられた。」『預言者と王たち』292頁。

主は北の王たちを御自分の裁きの器として用いられ、その北の王たちに対しては、彼らの果たした働きに対して報酬を支払うという聖書の原則に従われた。

同じ家にとどまり、彼らが供するものを食べたり飲んだりしなさい。働き人はその賃金に値するからである。家から家へ移り歩いてはならない。ルカによる福音書 10章7節。

主は、間近に迫る日曜法の時、アメリカ合衆国が猶予期間の杯を満たすとき、教皇権を用いて同国を罰し、なされた奉仕への報いとして、エジプトを教皇権にお与えになる。神の預言の御言葉は、エジプトが教皇権に与えられることを明らかにしており、この事実はダニエル書十一章四十二節と四十三節が確認している。教皇が行った奉仕への報酬は、十人の王が立てる頭となり、獣の像の全世界的体制を支配する者となることである。

トランプは竜の勢力に勝利する。彼はアメリカ合衆国における獣の像の時において、第八の頭、すなわち七つに属する者であるからだ。2020年にトランプを打ち倒した竜の勢力で

ある民主党の崩壊が、現在、進行している。神の御言葉は決して失敗しない。民主党にとっての「ラクダの背を折る一本の藁」は、イスラムの偽預言者である。2023年10月7日の攻撃は、諸国を怒らせ悩ませるというイスラムの役割にのみ帰せられうるものであり、その支持基盤の内部に楔を打ち込んだ。これにはさらなる攻撃が伴い、より大きな分裂を生み出す一方で、竜の勢力によって解き放たれた不法移民の洪水の愚かしさを認識する、地からの獣に属する市民の一階層を結束させるであろう。また、それは経済危機ももたらすが、その危機はすでに到来している。

そして大いなる欺き手は、人々に、神に仕える者たちこそがこれらの災いの原因だと信じ込ませるだろう。天の不興を買ってきた階級は、神の戒めへの従順が違反者に対する絶えざる譴責となっている人々に、自分たちのあらゆる災難の責めを負わせるだろう。日曜安息日を破ることによって人々は神を怒らせている、この罪のために災厄がもたらされ、それは日曜日の遵守が厳格に施行されるまでやむことはない、そして第四戒の要求を主張して、こうして日曜日への尊崇を打ち壊している者たちは民を悩ます者であり、神の恵みと地上的繁栄への回復を妨げているのだ、と宣言されるだろう。こうして、昔、神の僕に対して突きつけられた非難が、同様にもっともらしい根拠に基づいて繰り返されるのである。「アハブがエリヤを見たとき、アハブは彼に言った、『イスラエルを悩ます者はおまえか。』彼は答えた、『イスラエルを悩ましているのは私ではない。主の戒めをあなたがたが捨て、あなたがバアルに従ったので、あなたとあなたの父の家こそがそうしているのだ。』列王記上18章17、18節。」人々の怒りが虚偽の告発によってかき立てられるとき、彼らは、背信のイスラエルがエリヤに対してとったのと非常に似た態度を、神の使者たちに対してとるようになるだろう。大いなる論争、590。

安息日を守る人々は、「神の恩寵と地上的な繁栄」が失われた理由として名指しされることになる。私たちの目前に迫っているこの時期を描写するにあたり、彼女はエリヤとアハブのやり取りに言及している。彼らが互いを非難し合ったのは、カルメル山での対決に先立ってのことである。間もなく来る日曜遵守法に先立ち、裁きが次第に厳しくなることによって、地上的な繁栄と神の恩寵は取り去られる。先に引用した一節は、日曜遵守法の試練の時に起こる一連の出来事を指しているが、試練の時は二つある。アメリカ合衆国内で起こる「獣の像」の試練は、その後、全世界で繰り返される。その一節に記されたすべての出来事は、間もなく来る日曜遵守法へと至る歴史の中で、そしてその後続く世界的な日曜遵守法の危機の歴史の中で、予言的成就を見いだす。

『Testimonies』第九巻の第一段落は、十一頁から始まっており、したがって「九・一一」を指し示しているが、そこには次のように記されている。「私たちは終わりの時に生きている。急速に成就しつつある時のしるしは、キリストの来臨が間近に迫っていることを告げている。私たちの生きている日々は厳粛にして重大である。神の御霊は徐々に、しかし確かに、この地上から引き上げられつつある。神の恵みを軽んじる者たちの上には、すでに災疫と裁きが降りかかっている。陸と海の災害、社会の不安定、戦争の警報は、不穏な前兆である。それらは、きわめて重大な出来事が近づいていることを予告している。」さらに叙述は続き、十四頁には次のようである。「教育者や為政者の間にあってさえも、現在の社会状態の根底にある原因を理解している者は多くない。統治の手綱を握る者たちは、道徳的墮落、貧困、貧民化、そして増大する犯罪という問題を解決することができ

ない。彼らは、事業の運営をより確固たる基盤に据えようと空しく努力している。人々が神の御言葉の教えにいつそう注意を払うなら、彼らを悩ませている諸問題の解決を見いだすであろう。」

聖書は、キリストの再臨直前の世界の有様を描写している。強奪と搾取によって巨富を蓄えている人々については、次のように記されている。「あなたがたは、終わりの日のために宝を積み上げた。見よ、あなたがたの畑を刈り取った労働者の賃金は、あなたがたによって不正に差し止められて叫んでいる。刈り入れをした者たちの叫びは、万軍の主の耳にまで届いた。あなたがたは地上で贅沢に暮らし、放縦に振る舞い、屠殺の日のように心を肥え太らせた。あなたがたは義人を罪に定め、殺した。彼はあなたがたに抵抗しない。」ヤコブの手紙 5:3-6。

終わりの日には、人々は「事業活動をより確かな基盤に置こうと、むなしく奮闘している」。民主党、そのプロパガンダ機関、そしてグローバリストの銀行家たちはむなしくあがいており、バイデン政権が成し遂げたと彼らが主張する実際の金融の安定について嘘をついている。「キリストの再臨直前の世界」の象徴の一つは、「強奪と恐喝によって」「巨万の富を蓄えた」人々である。

ホワイト姉妹が引用したヤコブの手紙の箇所先立つ三つの節は、次のとおりである：

さあ、富む者たちよ、あなたがたに降りかかろうとしている災いのために泣き叫べ。あなたがたの富は朽ち、衣服は虫に食われている。あなたがたの金と銀はさびついでおり、そのさびはあなたがたに対する証拠となって、火のようにあなたがたの肉を食い尽くす。あなたがたは終わりの日のために財宝をため込んだ。ヤコブの手紙 5:1-3

「終わりの日々」の預言的特質の一つは、詐欺によって築き上げられた驚くべき富によって名を知られる者たちが存在することである。そうした者たちは毎日のように報道に取り上げられている。その時はすでに来ている。その時代には、国際的な銀行家や億万長者の富は、錆びつく金と銀として表される。銀や金は錆びない。ゆえに聖書は、終わりの日々に富める者たちの富に全く予期せぬことが起こることを指し示している。すなわち、彼らの金と銀が錆びつくのである。その経済崩壊の前兆は、2001年9月11日に第三のわざわいが到来したときに現れた。第三のわざわいとしてのイスラムは、聖書の預言における東風であり、終わりの日々には、その東風が、タルシシュの船に象徴される経済を沈めるのである。

見よ、王たちは集まり、共に進んだ。彼らはそれを見ると、驚き、うろたえ、慌てて逃げ去った。そこで恐れが彼らをとらえ、産みの苦しみをする女のような痛みが彼らに臨んだ。あなたは東風でタルシシュの船を打ち砕く。詩篇 48:4-7

(産みの苦しみの女のように) 諸国民の怒りの激化を表し、第三の災いに属するイスラムによってもたらされる東風がタルシシュの船を沈めるとき、グローバリストの王たち、億万長者、銀行家たちは恐怖と痛みにさいなまれる。イスラムは、地域経済と世界経済をまさに打ち砕き、民主党やグローバリストではなくトランプの強みに完全に合致する経済的・政治的環境を生み出そうとしている。というのも、「なした奉仕への報酬として」七つに属する第八の頭に竜の権威が与えられるからである。神はトランプを用いてギリシア人の王国全体を奮い立たせた。というのも、神はいまや、全世界が二つの階級に

分けられるような状況をもたらしておられるからである。

現在グローバリストによって運用されている経済システムは、ウッドロウ・ウィルソンの大統領任期中に初めて導入された。ウィルソンは、差し迫る第一次世界大戦への不介入を公約に掲げて当選した民主党員だったが、結局は第一次世界大戦下の大統領となった。ウィルソンは、国際連盟（国際連合の前身）を推進したことで最もよく知られている。彼の在任中、1913年にウィルソンが国家の経済運営を連邦準備制度の管理下に置いたことで、米国の金融構造はグローバリストの手に委ねられた。

第一次世界大戦期の大統領の預言的な特徴は、戦争に参加しないと約束したことだったが、それは嘘であった。彼は国際連盟という一つの世界政府を推進した主導的な歴史的人物であり、アメリカ合衆国の財政を世界の銀行家たちに引き渡すことを主導した。彼は1913年から1921年まで在任した。1919年、世との妥協によって象徴されるアドベンチズムの第三世代は、ウィルソンの世との妥協と並行して進んだ。なぜなら、二本の角は互いに並行しているからである。ラオディキア的アドベンチズムの第三世代において、彼らは自らの霊的主権の外にいる者たちの手に、医療制度と教育制度の支配を委ねた。同時に、ウィルソンはアメリカ合衆国の財政的主権をグローバリストの銀行家たちに引き渡し、さらにアメリカ合衆国の政治的主権をグローバリストに引き渡そうとたゆまず努めたが、失敗した。

第一次世界大戦中の大統領であったウィルソンは、第三次世界大戦を示す預言的な特質を体現している。彼は、アメリカの主権ではなくグローバリストのアジェンダに最も適した方向へと世界経済を統制することに連邦準備制度が関与するという歴史を象徴している。彼は、その支配が短命であるにせよ、新世界秩序が最終的に聖書の預言における第七の王国となるという目標を達成する時代に在任する大統領を表している。この事実は二つの証人によって確証される。というのも、第一次世界大戦後にウィルソンが国際連盟への加盟に失敗したことは、第二次世界大戦直後にアメリカが国際連合に加盟することを予示していたからである。これら二つの証人に基づけば、やがて到来する日曜法は、それに続いて国の破滅をもたらし、ウッドロウ・ウィルソンの大統領時代以来グローバリストが推し進めてきた一世界政府としての国際連合の確立へとつながる。

これらの預言的な特徴は、七人のうちに属する第八で最後の大統領の政権において存在していなければならない。ウィルソンの後を継いだのは共和党のウォレン・ハーディングで、彼は「狂騒の二十年代」と呼ばれる時代の幕開けを告げ、そこから1929年の大暴落が起こり、それが大恐慌へ、さらに第二次世界大戦へとつながっていった。トランプの最初の大統領任期は「狂騒の二十年代」であり、バイデンは地の獣の歴史における史上最大の恐慌の幕開けを告げようとしている。その恐慌は1929年の大暴落によって典型化されただけでなく、エレン・ホワイトの時代の「1837年のパニック」によっても象徴されていた。

1830年代のアメリカ合衆国における不況は、一般に「1837年恐慌」と呼ばれる。これは1837年から1840年代半ばまで続いた深刻な景気後退で、1830年代の多くを覆った。1837年恐慌は、金融危機、銀行の破綻、広範な失業、そして長期にわたる経済的困難を特徴としていた。

1837年恐慌は「投機バブル」によって引き起こされ、1929年の暴落も同様であった。1837年にバブルがはじけると、広範な倒産と経済的損失を招いた。投機バブルの余波で一連の銀行破綻が発生し、銀行制度への信認が失われ、広範な金融パニックを引き起こした。国際貿易の縮小と米国輸出に対する需要の減退によって悪化した世界的な景気後退も、米国の経済的苦境に拍車をかけた。

世界恐慌の幕開けとなった1929年の暴落に先立ち、株式市場では投機的バブルが形成されていた。1920年代、アメリカ合衆国では「狂騒の二十年代」として知られる経済的繁栄の時期が続き、急速な産業成長、技術革新、そして広範な楽観主義がその特徴だった。この時期、株式市場での投機は、容易な信用供与、信用取引（借金で株を買うこと）、そして内在価値ではなく将来の価格上昇の予想に基づく投機的な株式購入に支えられて急増した。株価は持続不可能な水準まで上昇し、それが表す企業の内在価値をはるかに上回った。

2000年3月から2002年10月にかけて、「ドットコム・バブル」が崩壊した。2001年9月11日は、その経済危機のただ中に起きた。その後、2008年には住宅バブルが崩壊し、これは世界金融危機、あるいは大不況と呼ばれた。

日曜法に至る過程で、アメリカ合衆国の市民のこの世的な繁栄は取り去られる。この世的繁栄の取り去りは、十四万四千人の封印の期間に起こる。封印の期間の最初の道標は、経済的な大暴落と結び付いていた。2001年9月11日は第三天使が力を受けた時であり、その同じ天使が1844年に到来したとき、その歴史も経済的な大暴落と結び付いていた。1844年は、間もなく来る日曜法を予表しており、2001年9月11日は封印の期間の始まりである。イエスは常に、物事の終わりをその始まりで例証する。1929年の大暴落は第二次世界大戦に先行し、それへとつながった。

次回の記事でこの研究を続けます。

私たちという民の間には、怠慢と罪深い不信があり、そのために、他国の人々に私たちの光を輝かせるという、神が私たちに委ねられた務めを行うことが妨げられてきた。この大いなる働きに踏み出し、危険を冒すことを恐れる心がある。資金を費やしても見返りが無いのではないかと恐れるのである。たとえ資金を用いても、それによって魂が救われたことが見えないとしたらどうなのか。もし私たちの資金の一部が全くの損失になったらどうするのか。何もしないより、働き、働き続けるほうがよい。どちらが栄えるか、あなたがたには分からないからである。人々は特許権に投資して大きな損失を被ることがあるが、それは当たり前のこととして受け止められている。しかし神の働きとその大義のためとなると、人々は冒険することを恐れる。魂を救う業に投じて即座の利益をもたらさない金銭は、彼らには全くの損失に見えるのだ。今、神の大義のためにごくわずかしか投じられず、利己的に抱え込まれているまさにその資金は、やがて、すべての偶像とともに、もぐらとこうもりに投げ捨てられることになる。永遠の光景の現実が人の感覚に開かれるとき、金銭の価値はほどなく、きわめて突然に下落するだろう。『真の宣教師』1874年1月1日。